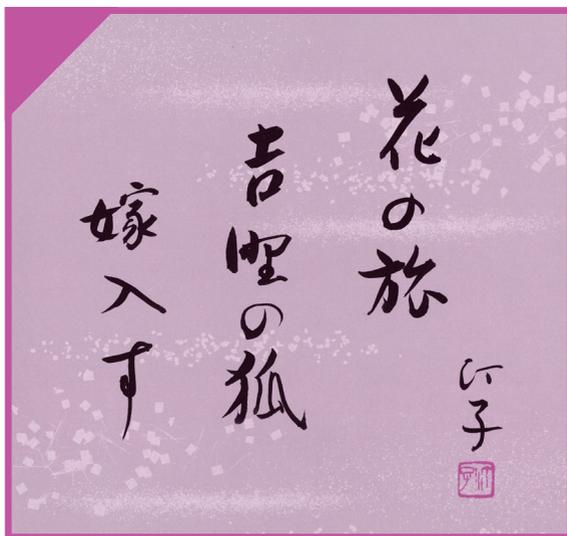


# 詠 詠 集

六 月 号

—特集—

総会資料添付



# 花鳥諷詠®



令和4年6月■第411号 ————— 目次

---

花鳥諷詠選集 .....	岩岡 中正 ..... 2
	永森ケイ子 ..... 4

虚子研究 虚子宛書簡を読む（三十五） 明治二十五年九月十一日 河東碧梧桐書簡（封書） .....	黒川 悦子 ..... 7
--	---------------

虚子研究 『六百五十句』研究（28） .....	12
--------------------------	----

一頁の鑑賞.....	長谷川禎子 .....16
	西田 梅女 .....17

この人の作品 .....	大橋美代子 .....18
--------------	---------------

地区行事開催日程表 .....	19
-----------------	----

総会資料 .....	1~20
------------	------

編集後記 .....	40
------------	----

---

「日本伝統俳句協会」と「花鳥諷詠」は公益社団法人日本伝統俳句協会の登録商標です。

# 花鳥諷詠選集

## 岩岡中正選

### 特選五句

雛の灯に偲ぶ集ひとならうとは

柏原 早川 水鳥

青麦の国安かれと祈りけり

山口 藤岡 いく子

園といふ梅の世界の始まりぬ

福岡 大石 靖子

叶ふ絵馬かなはぬ絵馬も梅の宮

鳥原 西田 比呂志

野焼して日本神話の中に入る

太宰府 持永 真理子

### 二句短評

一句目——今回は、二月二十七日の稲畑汀子名誉会長  
の急逝に驚き悲しむ句が多かった。中でも掲句は、この  
明るい雛の灯の下でこうして「偲ぶ集ひとならうとは」  
と感動が率直に出ている。驚愕と悲しみの深い句である。  
二句目——いうまでもなくウクライナを思う句。この  
国は世界の穀倉地帯。本来なら広々と青々と麦畑がひ  
ろがる頃を、今は戦火にあり人々は必死に逃げまじう。  
この「青麦」という、世界に通じる「いのち」の季語を  
通して、私たちの花鳥諷詠詩は世界にひろがるのである。

### 入選六十句

吾が息の七色となるしやぼん玉

泉大津 多田羅紀子

雪国は屋根の上にも雪の屋根

浜松 朝井 治代

瀬をはやむ水の輝き猫柳

高知 栗坂 海馬

悉く大地めざめて雪解川

神戸 平岡 良一

春寒しまたたく星になられけり

熊本 久光 有子

抽斗の階段箆笥ひな祭

日野 草刈 幸風

桃の日や皇太后の小さき靴

福島 大西 稔子

目で数へ声でかぞへる木の芽かな

宇部 永田 芳子

しばらくは春月入るる仏間かな

鹿児島 平山 洋子

胸中にぼつかりと穴鳥雲に

熊本 渡邊佳代子

玄関に紙雛居間に土鈴雛

生駒 南 純子

甘いものぼりぼり食べて年惜しむ

山口 西 やすのり

その中に汀子師もゐて鶴帰る

高知 井上真知子

一行に春まだ寒き札所寺

高槻 林 曜子

春の雲汀子先生ありがたう

大分 野村香代子

夕さりて水の都の蜺舟 福岡 沖永 洋美  
 摘み取りてハイネに栞る董かな 神戸 前田 容宏  
 鶴の舞ふ句碑に佇み黙禱す 鹿児島 西村正一郎  
 ぼんぼりを吊つて花待つ山となる 西予 黒田 美穂  
 羽衣を忘れし天女春夕焼 北海道 伊藤ていこ  
 梅苑のしづかに込んでゐる日和 堺 杉山千恵子  
 潔く世代交代落椿 小樽 岩崎スイ子  
 一天をなほ高くして鷹渡る 吹田 辻 昌子  
 思ひ出は花の句会の枳殻邸 金沢 荒谷みえ子  
 庭師来て梅の白さを見てをりぬ 始良 五反田加代  
 京の旅一目惚れして買ふ雛 白山 岩本 松江  
 看取りてふ二人の時間紅椿 高松 岩田 賀代  
 思はざる訃報に東風の吹き止まず 西宮 山之口倫子  
 雛まつり五人囃のやうな客 長岡京 藤堂くにを  
 桃色の時の過ぎゆく雛の宴 高知 岡林知世子

師の訃報聞くより霞みゆくばかり 鳥取 椋 誠一朗  
 大いなる忌日加はる二月尽 荒尾 大川内みのる  
 永訣の御声とも鶯頻り 市原 鈴木 南子  
 誰彼に会へて初花にも会へて 宇佐 尾崎 陽子  
 大いなる訃に列島の冴返る 吹田 河辺さち子  
 耕して今日より記す農日誌 輪島 向 佐ち子  
 呼んでみる汀子先生春の星 香川 湯川 雅  
 白木蓮ひと山なせる寺領かな 浜田 高村美都子  
 水音のひかり飛びつく猫柳 大牟田 介弘 紀子  
 涅槃図のやうなり師恩嘆きけり 鳥根 猪俣 北洞  
 エプロンを広げて貰ふ土筆かな 東京 荒井 桂子  
 一ト鋏に目覚むる大地春の土 平戸 前田 詠子  
 浜に待つ妻に手を振り若布刈舟 吹田 小井川和子  
 おだやかな晩年なりし干大根 熊本 宗像 和子  
 春雷の夜の出来事でありにけり 小樽 伊藤 玉枝

● 永森ケイ子 選

特選五句

雛の灯に偲ぶ集ひとならうとは

柏原早川 水鳥

迷ひにも似て迷ひなき蝻の道

芦屋勝田 展子

一天をなほ高くして鷹渡る

吹田辻 昌子

野遊のはちきれさうな好奇心

高松谷澤 正子

偲ぶとは仰ぐことなり鶴の空

鹿兒島 亀割 芙蓉

二句短評

一句目——雛の集いが偲ぶ集いとなってしまった。あまりにも突然であった大切な人との別れにまだ、受け止めきれない作者の気持ち「なるうとは」に表現され、語りつくせない心情の深さが伝わってくる。

二句目——真つ直ぐ行っているのかと思うと曲り何処かへ行きたいのか、それとも迷っているのか分からないが結局行きつく所へ収まる。どこか人の生き方にも似ていて共感を覚える。

美しく消えゆくために春の雪 長野 加藤 公男  
 青き踏み五臓きれいになりけり 埼玉 藤井 光子  
 啓蟄や凶鑑の虫も動きさう 福岡 中野 弘子  
 師は天へ地に温かな詩を遺し 尾張旭 佐藤 武彦  
 踏むまいとして踏んでゐる犬ふぐり 久留米 野口 桂子  
 存分に囀浴びる丘の墓 たつの 竹内 澄子  
 暖かくおやんなさいと勧められ 町田 小森まさひこ  
 猫柳水棹寝かせてくぐる橋 太宰府 野田 杉子  
 悲しみにうろたへてゐる余寒かな 尾道 日田 富恵  
 青き踏む天地の楽聴きながら 高崎 並木 秋野  
 夫の友夫の教へ子あたたかし 鹿兒島 青野 優子  
 偲ぶとは仰ぐことなり鶴の空 鹿兒島 亀割 芙蓉  
 ものぐさの二月終つてしまひけり 広島 濱本伊勢代  
 穴を出し蛇も宇宙の一過客 七尾 橋本紀美子  
 踏み入れれば雛の視線一斉に 筑紫野 馬場三知子

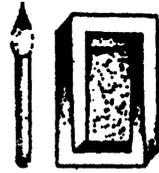
入選六十句

浅き春日差し大地に吸ひ込まれ 福岡 馬場 紀子  
 道路まであと五十歩や雪を搔く 鳥取 砂流 育子  
 見られるてふらここ高く高く漕ぐ 徳島 吉田 有子  
 しばらくは春月入るる仏間かな 鹿児島 平山 洋子  
 闇焦がし先の闇へと走る野火 福岡 島原 仁代  
 水ぬるむ固き結び目解くやうに 福岡 蓑原 郊雨  
 春愁や忘れられざる事ばかり 高松 白根 純子  
 話すこと聞くこと尽きず梅日和 高松 肥塚 英子  
 弛みゆく日差しに春の色動く 大牟田 西坂美也子  
 好奇心集まる子等に地虫出づ 高松 福家 敬子  
 寒鯉のひとかたまりを解く日差 福山 佐藤 浩子  
 乗りきると詠みし二月に逝かれけり 姫路 英賀美千代  
 受験子のなほ迷ひつつ出願す 柏原 鈴木 輝子  
 箱を出て光眩しき雛かな 東京 岩村 恵子  
 鳥帰る何か合図のあるごとく 彦根 大久保 樹

鶯や野山に色の蘇る 西脇 岸本 悦子  
 近づきし子の旅立や名残雪 長岡 佐藤 文子  
 蜷舟一艘浮かべ湖暮るる 松江 三浦 純子  
 悴みて受け容れ難き師の計報 七尾 松本 慶子  
 雪雲の去りて琵琶湖に戻る色 八尾 米澤 悦子  
 青麦の国安かれと祈りけり 山口 藤岡いく子  
 剪定の切口癒やす雨となり 市原 飯塚 咲子  
 一ト鋏に目覚むる大地春の土 平戸 前田 詠子  
 ものの芽のひとつひとつの力かな 芦屋 田村惠津子  
 おだやかな晩年なりし干大根 熊本 宗像 和子  
 髪切つてはにかむ少女草青む 鳥取 和田田鶴子  
 賑やかな女系家族や雛飾る 金沢 矢木 桂子  
 孫はみな男の子ばかりや古雛 横浜 秋吉美佐子  
 花の種蒔くや余命にかかはらず 福岡 山口 裕子  
 初蝶に誰も気づいてをらざりし 市川 抜井 諒一

滑りては這つては転げ地虫出づ 豊後高田 大波多美妃  
 菖蒲の芽違へし丈を潜る風 高松 岩瀬由美子  
 零れくる光のかけら初蝶に 香川 柴田 禮美  
 野遊の日差の匂ひ持ち帰る 高松 荒井多美枝  
 啓蟄や籠り居を解く目処となり 伊賀 北村 みち  
 耕して空の広さを宜へり 大阪 上西左大信  
 昨夜の雨春を連れ来し野に山に 鎌倉 山口 弘美  
 雛調度どれもままごとほどのもの 井原 平 春陽子  
 譲り合ふ車に会釈あたたかし 桐生 山崎 恵子  
 若き日を語るひととき桜餅 富士吉田 渡邊伊勢乃  
 一陣の風に初蝶見失ふ 加賀 牧野 妙子  
 春煖炉いらないと言ひいると言ひ 三田 吉村 玲子  
 花種の未来を想ひ蒔きにけり 長岡 今井 芳子  
 蟻穴を出でしばかりに餌を運ぶ 町田 坂下 洋子  
 道標あふるる春の光かな 東京 大井比呂子

哀しみを分かつ友居て浅き春 倉敷 大槻 秋女  
 ほんたうは淋しさ秘めて花ミモザ 札幌 齊藤 和加  
 一と声は別れの言葉鴨帰る 大分 福嶋ただし  
 退院の夫に春日のあふれけり 大分 村上 久子  
 春の雨しづかに土をほぐしけり 横浜 島村美沙子  
 あたたかや歩け歩けと言ふ主治医 岡山 山口喜代子  
 橋一つ一つに謂れ水温む 東京 坂口 祐子  
 戻り来し受験子に声かけ難く 伊賀 子日 康子  
 踏み入れば雛の視線一斉に 筑紫野 馬場三知子  
 寺町に残る駄菓子屋初燕 熊本 粟津 玲子  
 初蝶といふ間を風に見失ふ 宇佐 大森美代子  
 思ひ出の品片づかぬ日永かな 千葉 駒井ゆきこ  
 卒業や校門を出て髪を解く 横浜 川口 祐子  
 国境のなき大空を帰る鳥 福岡 森 順子  
 重き過去背負ひて笑まふ古雛 豊中 北橋 梟子



## 編集後記

西安へ北京の蠅と空の旅

汀子

「汀子先生は海外へもたくさん旅行されているのですよ」と、虚子記念文学館の小林祐代学芸員に、たくさんの写真を見せていただいた。ラクダの背にまたがった若き日の先生、チャイナドレス風の先生もいらした。コロナで閉ざされていた海外渡航もだいぶ緩和されてきた。このまま日本は、いつもの日常に戻るのだろうか。

●6月26日(日)は第35回通常総会を開催します。巻末の資料を御覧の上、まだ出欠のおはがきを出していらつしやらない方、欠席の方は必ず委任状に記名押印の上ご投函をお願いします。総会終了後、協会賞・花鳥諷詠賞の授賞式、続いて稲畑汀子名誉会長の追悼会も開催します。追悼会は後日動画配信も企画しています。

●動画つながりですが、井上泰至常務理事によるオンライン特別講座「俳句が上手くなる文法講座」(全二回)を企画しています。7月3日(日)、10日(日)いずれも夜8時から1時間。先着80名の予定です。

詳細・お申し込みは協会のウェブサイト (<https://haiku.jp/>) に6月上旬より掲載いたします。文語を使う意味や、「なり」「たり」「あり」の使い分

けなど、分かりやすく説明。これが分かれば俳句がもっと楽しくなりそうです。

須川 久

花鳥諷詠六月号(通巻第四一一号)

定価二五〇円(但し、本代は年会費を含む)

年会費一〇、〇〇〇円

令和四年六月一日

発行人 岩 岡 中 正

発行所 公益社団法人

日本伝統俳句協会

〒151 0073 東京都渋谷区笹塚二一八九

シャンブル笹塚二一B一〇一

電話 〇三三四五五五一九一

FAX 〇三三四五五五一九二

郵便振替 口座番号 〇〇一六〇七一八六八二〇

印刷所 日本ハイコム(株)

〒112 0014 東京都文京区関口一一九二二